Hijicho
大阪市立大学新聞

2014.5.7
第26号

連載新コーナー

8面 ◆ きみはこれからなにをする？第一回　商学部(2部)OB 和田隆博さん

ニュース

2面 ◆ キャンパス内で自転車に乗れない？
杉本キャンパス自転車問題に迫る
5面 ◆ ふたば祭2014 ―Mr.市大インタビュー
6面 ◆ 写真で綴る第9回ふたば祭
9面 ◆ 市大の新シンボルへ　新学舎お目見え

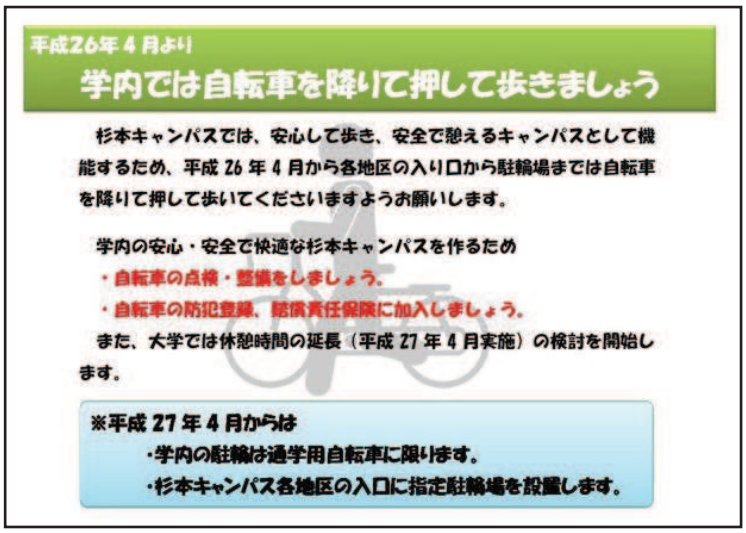
連載コーナー

4面 ◆ 温故知新　旧市大新聞を訪ねて
vol.9 「学生生活についてのアンケートの結果報告」
10面 ◆ 市大七不思議 ～The 7 Wonders of OCU～
第四回 学内レストランの由来に迫る
11面 ◆ choっとカフェログ
こだわりの味と接客スタイル 田jyu
12面 ◆ 大阪歴史探訪
第四回 阿倍野地区の昔の姿ー天王寺村の特産品ー

キャンパス内で自転車に乗れない？

杉本キャンパス自転車問題に迫る

2014年3月24日、大阪市立大学の学生ポータルサイト上で突如以下のような発表がされた。


平成26年4月より

学内では自転車を降りて押して歩きましょう

杉本キャンパスでは、安心して歩き、安全で憩えるキャンパスとして機能するため、平成26年4月から各地区の入り口から駐輪場までは自転車を降りて押して歩いてくださいますようお願いします。

学内の安心・安全で快適な杉本キャンパスを作るため

・自転車の点検・整備をしましょう。

・自転車の防犯登録、賠償責任保険に加入しましょう。

また、大学では休憩時間の延長（平成27年4月実施）の検討を開始します。

※平成27年4月からは

・学内の駐輪は通学用自転車に限ります。

・杉本キャンパス各地区の入口に指定駐輪場を設置します。

要約すると、2014年4月1日以降、杉本キャンパスを安全で快適なキャンパスにするためにキャンパス内では自転車を押して歩くよう推進し、走行を規制するという。また自転車の点検・防犯登録・賠償責任保険の加入を推進していくという。
これらの施策についての真意を確かめるべく、経営管理課の担当者への取材を行った。

今回の杉本キャンパス内での自転車の走行規制は一時的なものではなく、正式な決定なのか？ またどの部署がそれらの決定を行っているのか？
－ポータルサイト上に発表されている通り、一時的な施策ではなく、これからのキャンパス内の自転車に対する大学の方針である。ただし安心安全のキャンパスを実現するためには、大学・学生双方の協力が必要なので、これらの方針について、引き続き対話をしていきたい。この自転車に対する施策は経営管理課、企画総務課、学生支援課 学生担当、学務企画課などの様々な関係部署が関わって、話し合いを進めている。

教授会や学生担当委員会でも異論が出たそうだが？
－話し合いを進めていくうえで、色々な方から多様な意見を出していただいた。

このような決定がなされた背景は？
－まずは学生が安心・安全・快適に過ごせるキャンパスの実現である。現状は自転車がキャンパス内に溢れており、美観上の問題や、非常時に緊急車両が入れないという事態も起こりうるため非常に危険な状態である。またキャンパス内で自転車を飛ばして走る人もおり、実際に自転車の接触事故も起きている。もちろん学生が自転車を使って便利に移動したいという気持ちも分かるが、これらのリスクを排除し、キャンパス内での通行の安全性を確保するためにこのような規制は必要と考えている。

事前に学生にはまったく知らされず、決定事項という形で発表がなされたが、その意図は？
－意図は特にない。自転車問題は前々から問題にはなっていたが、今回新入生を迎える時期に合わせて大学側の話し合いで決まったことを発表した。

今後、学生とのこれらの問題についての話し合いの場を設ける考え、計画はあるのか？
－具体的に決まったわけではないが、何らかの形で学生の意見、観点等を交換する場は持ちたいと思っている。

キャンパス内での自転車の走行規制、防犯登録、保険の加入等は大学側としてどういった形で推し進めていくのか？
－キャンパス内に職員等を配置してこれらの規制について伝わっていない人に対して、声掛けなどで協力要請を行っていく予定である。自転車の整備、防犯登録、賠償保険の加入等については大学側は学生に対して意識啓発を中心に行っていく予定だ。大学側がこれらについてすべて準備するのではなく、大学生といえどもう大人なので、自転車でのリスクをしっかり理解して、あくまでも自発的に防犯登録や保険の加入等を行ってほしい。

キャンパス内での自転車の通行規制を行うことに伴う弊害への対策は？
－移動時間が増えることがまず考えられる。休憩時間は現在10分だが、今のままで十分なのかを検討し、来年度以降休憩時間を延長するかどうかを検討していきたい。

休憩時間を延長するとなると、それに伴い授業終了時刻も遅くなるため、これまでだとアルバイトに間に合っていたものが、間に合わなくなることも考え

るのでは？
－アルバイトは学生の生活に大きく関わってくる問題でもあるので、そういった点は配慮が必要になってくるだろう。

自転車の通行規制を進めることでそもそも事故は減るのか？
－少なくともキャンパス内や事故の多発する門付近で自転車を飛ばす人はいなくなるので、事故が起きる危険性は大きく減ると考えている。

こういった自転車の通行規制といった施策を行う前に他の対策を行うことは考えなかったのか？
－賛否両論はあると思うが、我々としては、まず学生の皆さんに自転車の通行規制について協力要請を行なうことで丁寧に進めていき、また多方面から様々な意見を募ることで、より良いキャンパス作りを行っていきたいと考えている。

発表によると学内に駐輪できるのは、通学用の自転車に限る (来年度以降) と書かれているがクラブ、サークル等といった課外活動で利用する自転車はどうするのか。
－発表した「通学用の自転車」だと少し語弊が生じてしまうが、これはキャンパス内の移動のみに利用する自転車は駐輪できない (そもそもキャンパス内での自転車通行を規制すると、そういった自転車の利用は意味がなくなる) という意味である。

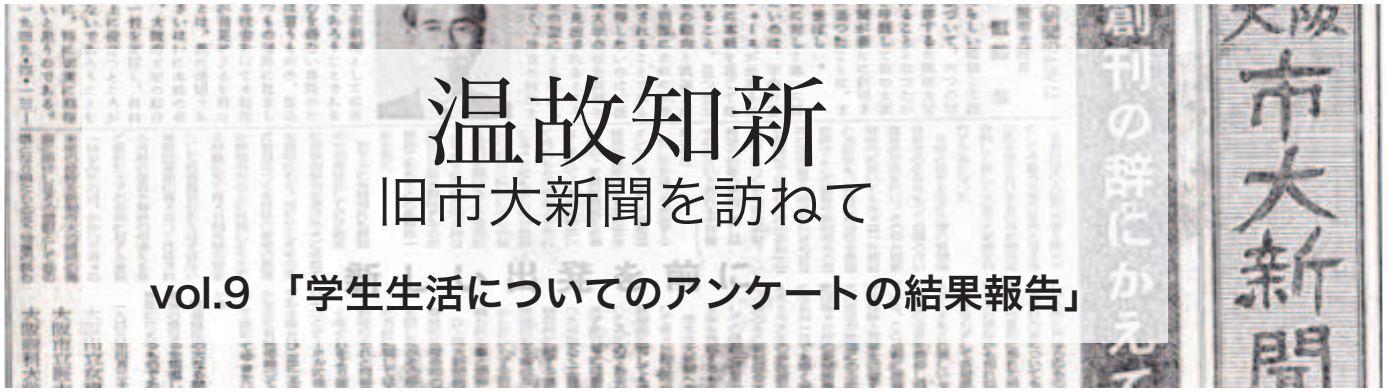
入り口付近に駐輪場を設置すると発表にあるが、スペース上、また景観上問題はないのか？
－現在自転車登録されている自転車はおよそ2000台あるが、規制の導入によって台数も減ることが予想されるので、それらを勘案してどれくらいのスペースが必要かを検討していく。ただ景観を重視して不便な場所に駐輪場を作っても利用しない人が増えるだけなので、うまくバランスを取りながら考えていきたい。

今後の施策決定のスケジュールは？
－話し合いはこれからも続いていく。まずこれからの半年は学生の皆さんにこの規則を丁寧に進めていきたいと考えている。長期的には、さまざまな意見を勘案して、より良いキャンパス作りに向けて施策を考えていきたい。

From editor

キャンパス内の自転車の通行に関する突然の発表に驚いた人も多かったのではないだろうか。このような大学側の突然の発表に対して憤りを感じた人も少なからずいることだろう。確かに、多くの学生がキャンパス内で自転車を利用している現状を考えると、学生を蚊帳の外に置いた状況の中、こういった決定事項として施行一週間前に発表を行うということは学生の立場からみると、どうしても大学に対して不信感を感じざるをえない。
ただ我々学生もなぜこのような規制ができてしまったのか、その背景を十分に理解しなければならない。キャンパス内にあふれる自転車、二人乗りや暴走する自転車、卒業したにもかかわらず処分せずに放置された自転車など、市大生の自転車に関するマナーはお世辞にも良いとは言えない。こうした規制を作ってしまった原因は我々学生にあることを自覚し、個々が意識的にマナーを改善しなければならない。
また、大学の施策に対し、ただ単に反対、賛成といった受身的な態度をとるのではなく、不満があるのであれば能動的に活動し、話し合う場の企画、大学側に問題の解決策の提示を行うといったより具体的な行動が必要だろう。
大学側も学生に対する説明が十分とは言えない。大学側の言い分を説明する場を持つ必要がありそうだ。現状のままだとお互いの言い分が不透明で議論が成立しない。
大学側も学生側もともにより良いキャンパスを目指すという面では究極的に目指すところは同じである。お互いに解決に向け、協力し知恵を出す必要がある。快適なキャンパスを実現するためには双方の協働が必要なのだから。

町田和紀 (Hijicho)



温故知新
旧市大新聞を訪ねて
vol.9 「学生生活についてのアンケートの結果報告」

Hijicho大阪市立大学新聞が誕生する60年以上前から発行されていた「市大新聞」の掲載記事をHijichoの手で復活させていくこのコーナー。今回は、1972年 (昭和52年) 6月10日に発行された「市大新聞」第411号より「学生生活についてのアンケートの結果報告」についての記事を取り上げる。

このアンケートは大学学生部が行ったもので、市大生の生活状態、学習状態などを問う、43の質問が設定され、当時の市大生の中から任意抽出によってなされたという。今の市大生と比べて当時の市大生はどのような学生生活を送っていたのか、生の声を聞いてみよう。
※以下の文章は当時の市大新聞からの引用
なお掲載にあたり、一部修正や注釈を加えてある。

＜課外活動について＞
クラブ・サークルの加入率は第一部で56.4％もあるが、第二部は27.5％で、第一部の半分程度しかない。また加入しているクラブ・サークルの種類としては、第一部の場合には「文化系」17.5％、「音楽系」が11.0％、「体育会系」29.2％で「体育会系」が最も多いが、第二部では「文化系」と「体育会系」が12.9パーセントで同率になっており「音楽系」のみ3.0％とやや少ない。現在「入っていない」もののクラブ・サークルの経験をみると「途中でやめた」としたものは第一部で26.1％、第二部で21.5％あり、したがってクラブ・サークルに「はじめから入らなかった」ものは第一部では16.7％、第二部では50.6％もあることになる。
クラブ・サークルへの加入の理由だが、これは「自分がやりたかったから」としたものが多く、第一部の59.9％、第二部の56.2％を占めているが、第一部では「友人がほしかったから」と「身体を鍛えたいと思ったから」が各26.5％で続き、「余暇利用のため」22.7％、「団体生活がしたかったから」16.5％が続く。次にクラブやサークルに入ることによって得たものを聞いた結果は全員が色々なことを挙げているが「教室では得られぬ人間的な交わりをえた」としたものが最も部で73.5％、第2部で75.0％が挙げている。「貴重な友人を得ることができた」が第一部で46.5％、第二部で46.9％で二位となっているが、「正課では得られぬ知識や技術をえた」としたものも多かった。

＜出席状況＞
出席状況についての結果を見ると、「常に出席している」としたものは第一部で9.8％、第二部で9.9％に過ぎず、「かなり出席」もそれぞれ42.9％、42.5パーセントで両者合わせても第一部で52.7％、第二部で52.4％でようやく半数を超えているにとどまる。
ントで両者合わせても第一部で52.7％、第二部で52.4％でようやく半数を超えているにとどまる。そして「ほとんど出席しない」としたものが第一部で10.8％、第二部14.6％で、第一部の35.8％第二部の31.3％が「あまり出席していない」としているのである。文系理系によって比較して見ると文系に問題があるようだ。男女で比べると全体としての出席率は第一部、二部を問わず女のほうがよい。居住実態による比較は出席率のよい順に親戚・知人宅に住む学生、自宅に住む学生、アパート・下宿生となっており、アパート・下宿生の27.8％が出席していないと答えている。
以上のごとく、出席状況そのものはひどく悪いといってよい。ちなみに出席しない理由としては「授業がつまらない」「朝寝坊をしてしまう」が多数によってあげられており、「クラブ・サークル活動に忙しい」「アルバイトで時間がない」よりも多くなっていることが注意を引く。
また休講などで空いた時間が生じた場合、普段どうしているのかという質問には第一部の場合最も多いのは、「図書館に行く」の37.6％であり、「クラブなどの部室へ行く」が33.0％、「喫茶店に行く」が26.0％がつづき、その後、「食堂、ロビーへ行く」「家に帰ってしまう」「麻雀屋へ行く」の順になっている。

＜入学後の意識＞
大学に入学した目的をきいた結果を見てみると、最も多くのものが挙げているのが「専門的な学問、知識を修復するため」で51.5％、続いて「青年時代を楽しく過ごすため」13.0％、「教養を高めるため」12.9％、

＜入学後の意識＞
大学に入学した目的をきいた結果を見てみると、最も多くのものが挙げているのが「専門的な学問、知識を修復するため」で51.5%、続いて「青年時代を楽しく過ごすため」13.0%、「教養を高めるため」12.9%、「将来よい職に就くため」12.2%と続いている。
次に、大学に入ってから感じたことについての結果を見ると、第一部では「現実の大学に対しての失望」46.6%、「一般教養の実践についての疑問」44.7% と感じたものが多く、「大学での生活をどのように設計したらよいかの不安」30.6%「大学教育をどのように受けとめたらよいかという当惑」30.0%および「対人関係の不調和などによる孤独感、疎外感」28.1%などが続いている。

町田和紀 (Hijicho)

旧「市大新聞」のバックナンバーは全て、学術情報センター内6階の大学史資料室で閲覧することができる。また、資料室では、「市大新聞」だけでなく、学内で発行された様々な冊子や市大とその前身となる大学・専門学校の歴史資料等を保管しており、所蔵資料は閲覧、複写、および撮影することが可能である (ただし室長の許可が必要)。

大阪市立大学大学史資料室
Tel：06-6605-3371
E-mail：archives@ado.osaka-cu.ac.jp
https://www.osaka-cu.ac.jp/ja/academics/institution/archives
所在場所　大学内、学術情報総合センター6階
開室時間　9:30〜12:00、12:45〜16:00 (受け付けは15時30分まで)
休室日　毎週土曜・日曜、祝日、年末年始

ふたば祭2014 —Mr.市大は山本翔也さんに

4月17日から19日の3日間にわたって、市大ではふたば祭が開催された。
ふたば祭は毎年4月に新入生を歓迎するという意味を込めて催されており、第9回目となる今年のテーマは『いろとりどり』である。出店やステージ企画、教室企画など、今年も見どころ満載な内容となった。
多くのサークルが様々な出し物をするふたば祭は、まだ市大に入ったばかりの新入生にとって今後の大学生活の選択肢を広げる良い機会となったことであろう。

ふたば祭の一大ステージであるMr.市大コンテストで、今年の戦いを見事制したfolk song club 所属の山本翔也さんにお話を伺った。

山本翔也さん

—Mr.市大に選ばれた感想は。
正直びっくりしました。三枚目枠を狙ったコントがまさか優勝につながるとは思いませんでした。開始10分前に初めて打ち合わせしたものだったんで (笑)

—どのお題が一番緊張しましたか？
落ち込んでいる彼女を励ますというお題が難しかったですね。ちなみに、自転車のサドルが盗まれたという話は実話です (笑)

—今まで自分がイケメンだと思ったことは。
あんまりチヤホヤされないのでわからないです(笑) ただ仲のいい女友達は多いですね〜。

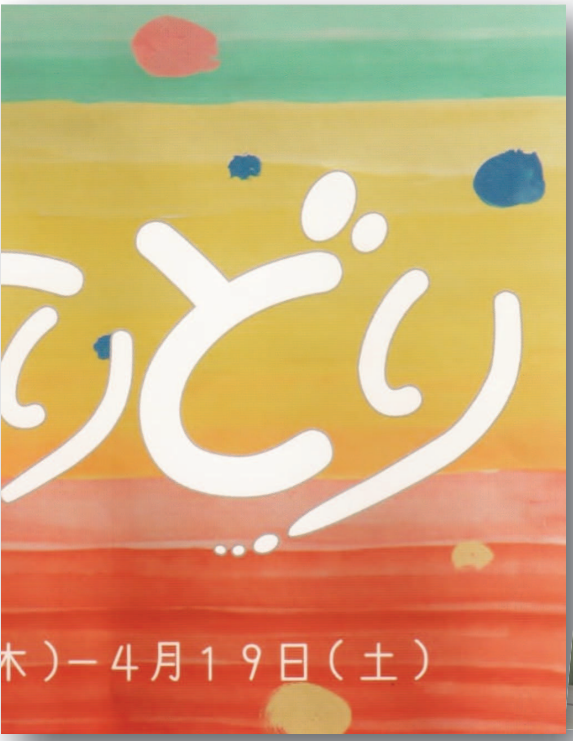
—Mr.市大としての抱負は。
せっかく少しでも名前が広まったので、サークル活動に活かしたいと思います。賞品は有効活用させてもらいます！投票してくれた方ありがとうございました！

文：大塚成美・古迫肇 (Hijicho)、Hijicho取材体験会参加者
写真：新宅慶騎 (Hijicho)

次項⇒写真で綴る 第9回ふたば祭

写真で綴る 第9回

ふたば祭



きみは これから なにをする？

第一回 商学部(2部)OB 和田隆博さん

「きみはこれからなにをする？」は、大阪市立大学を卒業したOB・OGが現在どんな人生を歩んでいるのか、どんな志を持って生きているのかを紹介していくコーナーです。

2012年に大阪市立大学部商学部2部 (現在は廃止)を卒業された和田隆博さんは、現在東住吉区でNPO法人子どもデザイン教室を運営なさっています。ここでは、親と暮らせない子どもたちの自立を支援することを目的として、「学習活動に創作活動を掛け合わせた感覚教育」を行っておられます。

誰かの言葉から 何かが変わる

―子どもデザイン教室を開講された経緯を教えてください

高校を卒業してから、22歳でグラフィックデザインの会社を立ち上げました。一生懸命作ったチラシやポスターが、期日になると破棄される儚さに面白さを見出しつつも、それを何十年も続けていると、私の仕事は社会の役に立っているのか、と疑問を感じるようになりました。世の中の役に立つことが他にもあるのではないだろうか、と考えるようになりました。

そんなことを考えながら、高校でマーケティングデザインの授業を受け持つようになり、人に教えることの面白さを感じるようになりました。自分が持っている知識を教えることで、子どもたちは変わっていきます。そこで、子どもを対象にしたデザイン教室を開こうと思いました。ですが、その子どもデザイン教室の構想をある人に話すと、「和田さんの考えは甘い。世の中にはお金持ちになりたくてもなれない人もいる。お金持ちの人をよりお金持ちにする方法を教えてどうするの？もう一度考え直してみたらどうか？」と言われて、閉口してしまいました。

その言葉が契機となって、近くにある児童養護施設を訪問してみました。そこでは、施設にいる子どもの約9割は、親がいるにも関わらず様々な事情で一緒に暮らせない現状があり、子どもたちに深刻な影響を与えていることが分かりました。施設で暮らす子どもたちの約4割に虐待や育児放棄の経験があると聞きました。また原則として18歳で施設を出なければならず、頼れる身寄りもお金も知識も少ない状態で社会で生活をしなければなりません。
そこで、この子どもデザイン教室を子どもたちにとって生きる術を身につける空間にしたいと考えました。

―大阪市立大学に入学されるきっかけは何だったのですか？

高校で授業をしているとき、ある生徒に尋ねられました。「先生、どこの大学出てるの？」社会人講師の資格でしたから「大学行ってないよ」と答えましたが、高校で人に教えているのに大学を出ていないのは少しまずいなあ、と感じました。以前から勉強はしたいと思っていたのですが、なかなか機会がありませんでした。高卒でも立派にお金を稼げるんだ、ということを証明したかったというのもありました。しかし、高校で教えるためには大学で学ぶ必要があると感じ、社会人として働きながら、大阪市立大学商学部2部に入学しました。

市大で大好きだったのは、山田仁一郎准教授の授業です。今でも尊敬しています。

生き抜くために必要な想像力

子どもデザイン教室をされている中で感じたこと

社会の中で、子どもが犠牲になっていることを強く感じます。

大昔の日本は、村を単位とした農耕社会で、血縁を越えた共同体でもありました。工業化が進み、家族のあり方が、大家族、核家族へと変化しました。今は、経済至上主義がいき過ぎ、核家族さえもバラバラになって、家族が霧状に分散していっている気がします。母子家庭の増加に代表されるように、特に低所得者層ではその歪みの影響を子どもが受けています。私は現在、小学2年生の男の子の里親でもあります。正直途方に暮れることもありますが、それは子どもが悪いのではなく、育ってきた環境が子どもをそうさせるのだと思います。そして子どももしんどいのだと感じます。

こういう活動の中で、子どもたちの口から「生まれてこなかったら良かった。」という言葉を何度も耳にします。幼少期にこんな感情を抱くものでしょうか。そんな子どもたちに応えたいと強く感じます。そのために子どもたちに想像力を学んでほしいと考えています。子どもたちの中には、今までしんどい思いをしてきたから、明日に希望を持ちにくい。今が楽しければそれでいい、という考え方をする子もいます。でもそれでは社会を生きていくことはできません。子どもデザイン教室で学ぶ過程の中で将来を設計する想像力を培ってほしいと思っています。

―将来の夢は何ですか？

血縁を越えた「新しい家族の形」をつくることです。みんな何か満たされないものがあって、家族とはそれを補い、共有できる関係だと思います。先ほど家族がバラバラになっているという話をしましたが、今流行っているシェアハウスは、血縁関係ではなく個人単位で繋がっているという意味で、新たな家族の形なのではないかと感じます。

私の考える「新しい家族の形」は、養育＋教育＋職能が一体となったものです。それは血縁を越えたこれからの共同体です。夫婦という一つの価値観で子どもを育てるのではなく、社会という多様な価値観の中で子どもを育て、自由主義社会に振り落とされない子どもを育て、社会に送り出していくインキュベータ(孵化装置)をイメージしています。

from editor

今回の取材を通して、和田さんは「社会の中で自分に何ができるのか」を常々よく考えておられるという印象を受けた。その原動力は「突き詰めること」だそうだ。
また子どもデザイン教室は、大阪市立大学がある住吉区に隣接する、東住吉区内にある。
今後どのような活動をされていくのか、注目していきたい。

文：石原奈甫美 (Hijicho)
写真：藤田悠以 (Hijicho)

市大の新シンボルへ　新学舎お目見え

平成26年4月10日(木)、大阪市立大学理系学舎新棟竣工記念式典が行われた。応援団による「桜花爛漫」の斉唱に続き、西澤良記学長の挨拶、橋下徹市長の祝辞代読がなされた。テープカットの後、銘板とモニュメントの除幕式、けやき通り視察、新学舎の内覧会、学術情報総合センターの屋上庭園視察も行われた。

西澤学長は、けやき通りが新たな学生の通用路となり、理系学舎新棟が新しい市大のシンボルとなることを期待していると話した。また、大阪市立大学の前身である大阪商科大学が杉本町に移転して80周年となる来年度に向けて、様々なキャンパス整備が計画されていることも述べられた。例えば、法学部棟や学術情報総合センターの改編、同窓会館としての一層の活用を目指した田中記念館の模様替えなどである。その上で、「市大をより勉学に励める場所、そして市民に愛され、市民に対して開かれた大学となるようにしていきたい」と締めくくられた。

橋下市長の祝辞では、昨年人工光合成研究センターが開設されたことなども踏まえ、「知的インフラ拠点として、大阪の誇りとなる大学になってほしい」との言葉があった。

理系学舎新棟に一歩足を踏み入れると、吹き抜けのエントランスが印象的である。レベルの高い研究を行う実験設備だけでなく、勉強したりコーヒーを一杯飲んでくつろいだりできる窓際のテーブルや、開放的なテラス席も完備されている。
この新学舎で、南部陽一郎博士のような世界に羽ばたく人材が育っていくだろう。

長澤彩香 (Hijicho)

市大七不思議 ～The 7 Wonders of OCU～
第四回　学内レストランの由来に迫る

「学校の七不思議」という言葉、これまでの学生生活を通じて皆さんも一度は聞いたことがあるだろう。およそ学校と呼ばれるところには多くの場合七不思議が存在する。古い学校は特に多く、その内容は単なる噂の場合もあれば、それぞれの学校の特徴や歴史を実にうまく捉えているものもある。
そこで今回130年余の歴史を持つ我らが大阪市立大学にも七不思議は存在するのではないか、そしてそれを通じて市大の今まで気づかなかった部分を再発見していけるのではないかという想いのもと調査を開始することにした。

市大には二つの学内レストランがある。学情の中にあるウィステリアと、田中記念館の中にあるめたせこいあだ。上回生なら、一度は訪れたことのある人が多いだろう。ところで、その名前の由来が何かご存知だろうか。今回筆者がその由来について調べたところ、市大内にあるレストランらしく市大に関わりのある名前であることがわかった。

まずはウィステリアの由来から紹介する。まずウィステリア (wisteria) は英語で藤の花を意味しており、藤は薄い紫の花だ。

上の写真は藤棚を写したものである。これは以前、市大にあったものだ。20年ほど前、学情ができる前、その敷地にあった藤棚なのである。

当時の航空写真を見ると、今では学情が建っている敷地に植物が植えられている場所があるのがわかる。ここに藤棚があったことが、学情内のレストランにウィステリアという名前がつけられる理由となったのである。

次にめたせこいあの由来を紹介する。めたせこいあという名前もまた同名の植物に由来するのだが、理由はそれだけではない。実はメタセコイアという植物の名前は、市大の教授だった人がつけた名前だ。

メタセコイア、別名アケボノスギはもともと絶滅したと思われていたのだが、それを元市大理学部の教授である故三木茂博士が発見し、命名された。メタセコイアは生きた化石としても有名な植物で、今でも学内レストランめたせこいあのある田中記念館の近くに植えられている。

七不思議の4つめ、いかがだっただろうか。こういった普段はあまり気に留めないちょっとしたことでも、疑問に思って調べてみれば面白い発見になるかもしれない。

佐伯美奈 (Hijicho)

●市大七不思議大募集
連載コーナー「市大七不思議」は読者から寄せられた応募に基づきHijichoが直ちに優秀な記者を派遣し真相の追求にあたります。
Hijichoでは市大の七不思議候補を募集しています。皆さんが知っている市大にまつわる不思議な話がありましたらぜひ我々にご一報を！
〇応募資格
大阪市立大学または大学院に在学中の学生・市大OB・教職員など市大関係者
〇応募先
hijicho@gmail.com まで件名に『市大七不思議候補』と明記し、必要事項 （ 推薦理由、わかる限りの情報：噂でも可 ） を明記の上ご連絡ください。
※応募していただいたすべての候補を取り上げるわけではありません。応募された候補の中から市大七不思議にふさわしいものを厳選したうえで取材させていただきますのでご了承ください。取材を行う人が決定した際にはこちらから連絡させていただき、取材にご同行をお願いする場合がございます。その際はご協力お願いいたします。

chOっとカフェログ

こだわりの味と接客スタイル
田jyu

JR杉本町駅の西　出口を出てすぐに見える『田jyu』という少し変わった名前の看板。この看板を見て、いったい何の店なんだろうかと疑問を抱いた方も多いのではないだろうか？扉を開ければ、アメリカの西海岸をモチーフとしたお洒落な空間が広がる店内。明るく快活な店員が笑顔で迎えてくれるそこは、昼はランチにカフェ、夜はバーと魅力満載のお店である。

田jyuという名前は、オーナーである田重田さんの名前にちなんでいる。年齢問わず多くの人に覚えてもらえるようにと付けられたこの名前は、確かに一度聞いたら忘れられない響きである。そんな田jyuの看板メニューといえば、何といってもふわふわな卵に包まれたオムライスだ。学生だけでなく様々な層のお客さんが、毎日田jyuのオムライスを求めて訪れる。もちろんランチメニューはオムライスだけでなく、ピラフやカレーなどその他のメニューも充実しており、思わず毎日通って日替わりで頼みたくなるほどだ。

写真＝オムライス (730円)、カレー (730円)

そんな田jyuの魅力はオムライスだけに留まらない。夜になればお昼のメニューから一変して、様々な種類のお酒とそれに合う料理が楽しめるバーとなる。アヒージョや海鮮カルパッチョなど、美味しそうなメニューがたくさんあり、こちらも何を頼むか思わず悩んでしまうことだろう。また、夜もセットメニューとしてオムライスを楽しめる。ランチと一味違う所は、夜は通常のオムライスに特製のデミグラスソースをかけて味わえることだ。昼も夜も非常に満足できるメニューとなっている。

昼から夜までたくさん詰まった田jyuの魅力は、深夜にまで及ぶ。なんと午前0時以降は激安バーへと変貌するのだ。奥の席で友人や恋人と楽しいひと時を過ごすのも良し。カウンター席で店員の方と話しながら一人の時間を楽しむのも良し。様々な楽しみ方のできる田jyuは、料理の味だけでなく接客にもこだわりを持っている。
「お店は人と人。スタッフが良い人であれば料理もお酒も美味しくなる」と語る店長の山本賢治さんの言葉通り、店員の方々は皆気さくで話しやすい人ばかりだ。じっくりと美味しい料理を味わうのもいいが、きっと誰かと話して笑いながら食べればより一層美味しく感じることであろう。
そんな風に、店員とお客さんだけでなくお客さん同士でも仲良くなってもらいたいと願う田jyuでは、様々なイベントも催されている。店内でDJブースを設けたり、立食パーティーをしたり、その他店内だけに留まらず、近くの公園でバーベキューを行ったりもしている。そういったイベントを通して、年齢や住んでいる場所の違いなどに捉われず、様々な人が出会い、お互いの価値観を共有できる場所を提供したいと考えているそうだ。

美味しい料理に、お客さんのことを第一に考える店員の方々。また、普通に過ごしていたなら話すこともないであろう人々との出会い。様々なものを提供してくれる田jyuに、まだ行ったことのない人はぜひとも一度訪れてみてはいかがだろうか。
写真提供＝田jyu

大塚成美 (Hijicho)

大 阪 歴 史 探 訪

第四回　阿倍野地区の昔の姿 ー天王寺村の特産品ー

古代には難波宮がおかれ、江戸の世には天下の台所として栄え、明治以降には近代都市として発展してきた歴史あるモダン都市大阪。ここではそんな大阪の歴史に焦点を当て、知られざる大阪の魅力を発掘すべく、大阪の歴史にまつわるいろいろなものを紹介していこう。

今回は数年前にはあべのキューズタウン、今年にはあべのハルカスが開業するなど急速に再開発が進んでおり注目を集めている阿倍野地区のかつての姿と、幻となった特産品について紹介する。

阿倍野地区は、今では多くの商業施設やビルが立ち並んでいるが、明治時代にまで遡ってみると、実はこの地域には農村が広がっていたのである。

当時は大阪の都市部といえば江戸時代の大坂三郷の範囲 (おおよそ現在の北区・西区・中央区にあたる) がメインであり、 周辺には多数の村が存在した。阿倍野地区はそういった村の一つである天王寺村の一角に位置していた。

天王寺村は明治に入って間もない頃は農村で、見渡す限り農地が広がっていたようであるが、明治二十年代頃から交通機関が発達し始め、同時期に天王寺駅も創られた。以降はそれに伴い住宅地化が行われていき、大正期に完全に大阪市に編入されるころにはかなり市街地化がすすんでおり、人口も増加していたという。天王寺村は、主に交通網の発達により農村から都市へと変化し、現在に至っているのである。

しかしそういった都市化に伴い、幻となってしまった天王寺村の特産品が存在する。天王寺蕪 (てんのうじかぶら) や天王寺大根といった野菜である。これらは江戸時代から明治時代末期にかけて天王寺村独特の名産品として栽培され、漬け物などにして全国に出荷されていた。いずれも味や形は評判がよく、竹垣に蕪を並べ、干し蕪を作る姿は天王寺村の風物詩であったといわれているが、明治の末期頃にズイムシなどの虫害にたびたび遭って衰退していき、その姿を消した。そして都市化に伴って農地がほとんどなくなったことによりこれらの特産品は幻となったのである。

また、天王寺蕪にはこのような言い伝えもある。かつて信州の野沢村の寺の住職が天王寺蕪を持ち帰って栽培したところ、気候の影響でかぶらのかわりに葉が大きく成長したので、その葉を漬け物にしたのが野沢菜の始まりと言われている。近年は否定的な説も存在するが、この言い伝えは天王寺蕪がいかに名の知れた特産品であったかを示しているということができるだろう。

実は天王寺蕪や天王寺大根は復活が目指されており、天王寺蕪に関しては大阪府Eマーク食品 (注) に認定され、商品化もされているので入手可能である。こういった幻の特産品から、かつての大阪市周辺の農村の姿を想像するのも面白いかもしれない。

注) 大阪府Eマーク食品：「素材・製法」ともに地元“大阪”にこだわってつくられた商品として、大阪府の認証を受けたもの。

参考文献

猿田博『阿倍野今昔物語』(1995年 阿倍野今昔物語編集委員会)
川端直正編『阿倍野区史』(1956年 阿倍野区市域編入三十周年記念事業委員会)

古迫肇 (Hijicho)

LINE、はじめました。

Hijicho公式LINEでは、Hijicho WebやHijicho公式Twitter同様市大生に有益な情報をお届けしているほか、ふたば祭でのクーポン配布、紙面版に先駆けた紙面データの先行配信など、他にはないサービスを行っています。
ぜひご利用ください！

Hijicho公式LINE
友だち追加はこちらから

スタッフ募集中。新入生上回生問いません。情熱が人を熱くする。